

# 『実隆公記』紙背、能番組二種

田 口 和 夫

徳田和夫氏が国文学研究資料館紀要第五号にのせられた「室町期物語の一絵詞資料——お伽草子性・座頭の語り・狂言と室町小歌——と題する論文は『実隆公記』紙背の絵詞草案を検討して文明六年（一四七四）時の謡講の存在を指摘されたり、狂言「水波」と共通の世界をもつ詞章の存在からそのような狂言の存在を推定されるなど、諸方に興味のあるものであった。この御論にみちびかれて『公記』の紙背文書を一覽していたところ、二種の能番組が管見にはいって。室町期の演能曲目については『能楽源流考』所収の「演能曲目調査資料」がもっとも信頼しうるものとなっているが、この二種はこれにもれたものであり、ふるい段階のものなので有用であるとかんがえられる。まずこれとその関係記事をかがげよう。曲名の下に記入した数字は『源流考』の「演能曲目の年次、回数対照表」において、これが何回目に位置するかの私のおぼえである。

A 明応四年（一四九五）二月六日七日裏  
泰山府君2、芦刈1、春親3、采女1、源氏

供養2、籠太鼓2、錦木2、鍾馗2、三井寺  
2、黒主1、狸々2、百万2、（巻十一）

a 明応四年二月二日丙辰天晴、午刻計著直衣指貫借講出科中納言、参内、今日大閣以下申沙汰、同外様衆各申沙汰也、有九獻、親王御方御出座、於台盤所有此事、猿楽有興、見物衆群集、有喧嘩、珍事也、夕陽程事終、各退散。（巻三上）

B 永正二年（一五〇五）四月十九日4裏  
くれは1、さねもり4、かきつはた5、ぬゑ  
2、けんしくやう3、とをる1、かすかりう  
しん2、はま川1、てんこ七郎2、せかい2  
ふなはし3、しやうく4、あふひの上2、  
百まん4、ふたりしつか4、（巻十二）

b 永正二年四月二十一日丙子午後天晴、行水、念誦如例、梳髮、依兼日仰八時分参室町殿、有猿楽、観世小四郎、今春等相共沙汰之、十五番敷、一獻、十二獻有供御等。（巻四上）

A・Bともにメモ的に説明なしにするされているのだが、そのおかれた位置によって、ほぼいつの時のものか判明するものである。一般に、このようなメモ、あるいは目録そのものは、あまり残存していない。小山弘志氏は「狂言と能」（『比較文学研究』第三五号）で『看聞御記』永享四年（一四三二）三月十四、十五日条にみえる猿楽側から提出された「目六」について「主催者側とても、つねに目録を出させたととは限らず、また出された目録を必ず書き留めたとも考えられない」とのべていられるが、まず世阿弥時代の慣習としては、そうであつたらうとかんがえられる。明応ごろにもなると、立合的演能はすくなくなつていようし、猿楽側からの目録提出は慣習化しているのではないかとかんがえられるのである。主催者は当然のこと、主たる観客にもこれはしらせられていたであらうし、メモもされていたであらう。メモが日記本文にかきいれられる昇格した例は『公記』文龜三年（一五〇三）九月二十六日二十七日裏（巻十二）のメモと同年月十九日条（巻四上）との間にみられる。この時は、実隆作の能「狭衣」を足利義澄がみたいということて演じられたもので、義澄の命によって特にこの能が会の冒頭に演じられたという、実隆にとつてはれがましい会だったのである。その故にこの番組はメモされ、日記本文にかきいれられるのである。それほどでもない会は観客にとつての話題があつたときメモされる程度である。Aの話題性はaと、Aのメモがかきこ

まれた紙背文書そのものから推測される。これは山科中納言言国から実隆が指貫を借り、それを返却するについての書状を、言国が勸返状として実隆におくった文書である。同部分の注（完成会刊）に「指貫を言国に借り近衛政家等申沙汰の御宴に参仕する事、明応四年二月二日に記事あり、又余白に左の目録あり、是時の猿楽の演目か」とするのにしたがつてよいであろうが、勸返状で言国が「尚々今日は御浦山敷存候、参仕候て拜見仕候へかしなど候へ共」などといっているところにこの能会の話題性が見てとれるであろう。こういう能があつておもしろかったと実隆がいった事に対する口ぶりだからである。

Bはbの記事だけではメモされる程の話題性は明確ではないが、紙背文書と日記を通覧すると、足利義澄を参内させようという朝廷側のうごきの中で実隆は室町殿へおもむくのであり、当然、事後に報告すべき立場にあるのであった。参内確実という返事とともに当然猿楽についての話題も存在しよう。同年四月二十九日3・2裏の女房奉書に、四月二十二日に実隆が報告したことについて「昨日はことにおもしろき事にてそと御うらやましくおほしめし候つる」とあることが、その証となしうであろう。

Aの会の演者は『お湯殿の上の日記』同年

二月二日条に「ふてゆるにのうさせらるゝ」とある「筆結」である。これは『源流考』第三篇第八章手猿楽考の十六に「筆大夫」としてこの記事をひいておるとおり京の手猿楽であつたらしい。この手猿楽の演能によって「芦刈」「采女」など世阿弥作とみられる能の実演記録がたしかめられるのはおもしろいことである。なお「黒主」は「志賀」であろう。

Bの会の演者はbにしるすとおり観世小四郎と金春である。立合的演能であろうか。小四郎は『源流考』に「道見の叔父に当る者」としるす。金春は「天鼓」に「七郎」としるされているので、この直前十三日から十七日までおこなわれた栗田口勸進猿楽に出演し、『栗田口猿楽記』に「舍利」の韋陀天役で「七郎」名が確認できる金春七郎氏昭（宗瑞）が出演し、当然父禪鳳も出演していたとみられる。Bの番組のうち「実盛・杜若・源氏供養・融・天鼓・舟橋・葵上・二人静」に釣点がかけてあるが、これはすぐれていたのかそれとも金春の演能にかけたのか未詳である。ここでも「兵服」「融」「浜川」の演能が確かめられる。このような紙背文書の類には、まだ他にも記録がねむつていよう。今後の博捜が期待されるところである。

(一九八〇・八・二三)

八たぐち・かずお 静岡英和女学院短大教授V